洋館に咲く花

奇譚シリーズ Part-2
by sorano

その１

「あの、私お話して宜しいのでしょうか？それに随分前の事ですし・・・。」

私の目の前に居る女性は、その楚々とした風情から二十歳ぐらいであろうか。私がここに居るのはまたあの編集長の突然のお沙汰である。

「飯田君いいかね、この人にあって話を聞いてだねぇ。面白可笑しく話を書いてくれたまえよ。」

そんな事は、会って話をしてみないと判らないと答えた。

「何を言っているんだね君は！実際に面白くなければ面白くする。可笑しくなければ可笑しくするというのが、文筆家の仕事だろう。ましてや君の様な三文文筆家は幾らでも居るんだから・・・そんな事言っていたら依頼が来なくなるよ?。いいのかなぁ・・。ん？」

と宣った。私は観念してその方に早速電話を掛けて、夕日に照らされた人気のない喫茶店で話を聞いているという状況なのだ。

「はぁ・・。」

思い出したら、思わずため息がでた。

「あの?・・・。」

「あっ、いえいえどうぞ。なんでもお話をして下さい。
　その前に何が宜しいですか？コヒーか紅茶でも。」

運ばれて来た紅茶に彼女は山盛りに砂糖を入れ、驚く私の目の前でぐるぐるスプーンでかき混ぜていたが、やがて決心をつけたのか・・静かに話し始めた。

「それで、私がまだ女学校に通っていた頃なのですが・・・家の近くに古びた洋館がありまして、そこのお庭にはそれはそれはりっぱで庭の一角には温室も見えました。」

女学校とはまた古い言い方だ、まぁ彼女は世田谷に住むの華族の末裔という事なので普通と違う環境で育ったそのせいだろう。

「それで、・・・。」

「いつも庭を手入れされている青年がおりまして、多分そこの家の息子さんかなにかだと思っていたのですが。」

ある時、突然雷雨になり傘をかりて後日傘を返しにいきお互い知り合ったのだという。
ここまではありきたりのラブストーリーだこれをどう面白くしろというのだ！と心の中で思っていたら。彼女は突然おかしなことを言い出した。

「飯田さん、時てなんだと思いますか？」

私が虚を突かれて言いよどんでいると。

「私は、河の水だと思うんです。」

「高いところから低いところに流れますからね。」

と答えると。

「ええ、ですが水の勢いはそれだけでなく、狭いところでは早く広くなると遅くなるし。せき止められる事だってあります。」

「私の場合も、少し人と違う河の形になったんですわね。」

にこっと笑った彼女の顔は幼くちょっと子悪魔のような可愛らしい笑みだが、次の瞬間光の加減でまた同時にとても年老いて見えた。

「由美子さん。ちょっと見て下さい、今晩あたりもうすぐ咲きますよ。」

白に縦じまブルーのストライプが入ったシャツを着た彼のにっこりと笑った顔はとても爽やかだ。

「ほんとうね。もうすぐだわ！」

由美子が見せられたのは月下美人だった。家で交配種させたオリジナルらしい。

１年に１度だから今夜見に来ませんか？という。花が好きな由美子はこの青年とうまがあった。花は夜１０時位から咲き始めて翌朝には萎んでしまう。

「月下美人は、なぜ年に１度咲く時を知るのか判りますか？」

青年は、難解な質問に答えられずにもじもじする由美子に静かに微笑んだ。

「判らないけど、一年に一度なんて寂しいわもっと長く咲くといいのに・・・」

「人生は１度きりで短いからいいんですよ。
　どうせ人はいつかは誰かと別れなければなりません。」

と彼は寂しそうに笑った。

「私は、素敵な好きな人といつまでも幸せに暮らしたい。」

由美子は彼がどこかへ行ってしまいそうな気がした。だから思わずこのように言ってしまい、顔を赤らめた。

温室はこのところ紅茶の甘ずっぱい匂いがする。テラステーブルにはいつも由美子が来ると特性のをポットに入れて飲ませてくれた。
様々な花弁を乾燥させたのをブレンドしたものだと聞いたが、何かは聞いても教えてくれなかった。とても美味しいというと、青年はふとはにかんだようなまた悲しそうな笑顔を見せることがありそれが妙に気になっていた。

”一人では夜、出してもらえないのだけれど友達と一緒なら
良いと言って貰えるかもしれない、お父様がご不在ならいいけど・・・。”

彼女は、親友を誘って夜にまた来る約束をした。

その２

今日は新月が出ている、月下美人が咲くのにうってつけの時だそうだ。
入り口の薄暗い電球電灯だけだけれど温室の上には天窓があってそこから青白い月の光が筋になって差込んでいる。

月下美人は、彼女らを待っていたかのように目の前で白い花弁がゆっくり開いていく。とてもゆっくり・・・、ゆっくり・・・。

と、由美子は急激な違和感を感じた。
最初は気が付かなかったが一緒に覗き込んでいた・・・友人の様子がおかしい。

”えっ。”

動かないのだ。固まっているのかと思ったがそうではないゆっくり瞼を瞬きをし始めた。

入り口のドアの隙間風に少しゆれていた椰子の葉もゆっくりと上下し始める。

彼女は、頭がおかしくなったのかと思った。

助けを求めるように、青年を見てまた愕然とした。

彼は何を思ったのか胸ポケットから小さな万能ナイフを、おびえている彼女の目の前で開き、自分の左の人差し指に斜めに押し当て始めたのだ。
由美子は余りに驚いたので怖いのに目をそれから逸らす事ができなかった。

ゆっくりとナイフの先が指の中に埋没していき、暫くすると血が赤く盛り上がっていく。そして、クノ字になった彼の指の第二関節の下へ丸い玉となって徐々に大きくなっていった。
青年と由美子は顔を向き合って、ふるふると震えるその血の一滴を息をつめて見守っている。その様はとても常軌を逸したものであっただろう。

そしてやがて、彼の指から、地面に向かって重力に耐えられなくなって放たれたその一滴。由美子はその一滴がとても愛おしく思えた。それは上下左右に伸縮しながらまるで太古の地球の海の初めの一滴のように落ちていった。そして、開きはじめた月下美人の白い花びらに落ちて跳ね、赤い小さな水滴をその周りに飛ばした。

「あっ。」

彼女は小さくつぶやいた。

その瞬間、時間は通常の速度に急速に戻って行った。

「きゃっ。」

次に叫んだのは、花を覗き込んでいた女友達の方だった。

青年は、誤って枯れはじめた隣の花を枝から取ろうとしてと切ってしまったと言って謝ったが、私には彼が自ら進んで指を切ったようにしか思えなかった。

そして、帰りがけに彼は私に耳打ちした。

「すまない、君を驚かせて・・・そして・・・」

「・・・・。」

次の日は日曜日だったので由美子は外に出る気がしなくて、一日中自分の部屋で過ごした。そして、月曜日学校から帰って例の洋館の前を通ろうか迷ったが、やはり気になって行って見たそうである。しかし青年の姿はなく温室に月下美人の１株だけが置いてあり、こう置手紙があったそうである。

　　”この花が、満開になる頃貴女を迎えに参ります。”

「そして、その日から私の時はゆっくりと流れはじめました。」

それはもう５０年も前の話だというのである。だとすると彼女はすでに何歳だというのだ？！私が信じられないと答えると。

「私はずっと彼が迎えに来てくれるのを待っているのです。」

彼女は、黙って鞄の中から小ぶりの箱を持ち出しそれをにっこり笑って開けた。
中には季節はずれの月下美人が今まさに満開を迎えるところであった。

（おわり）